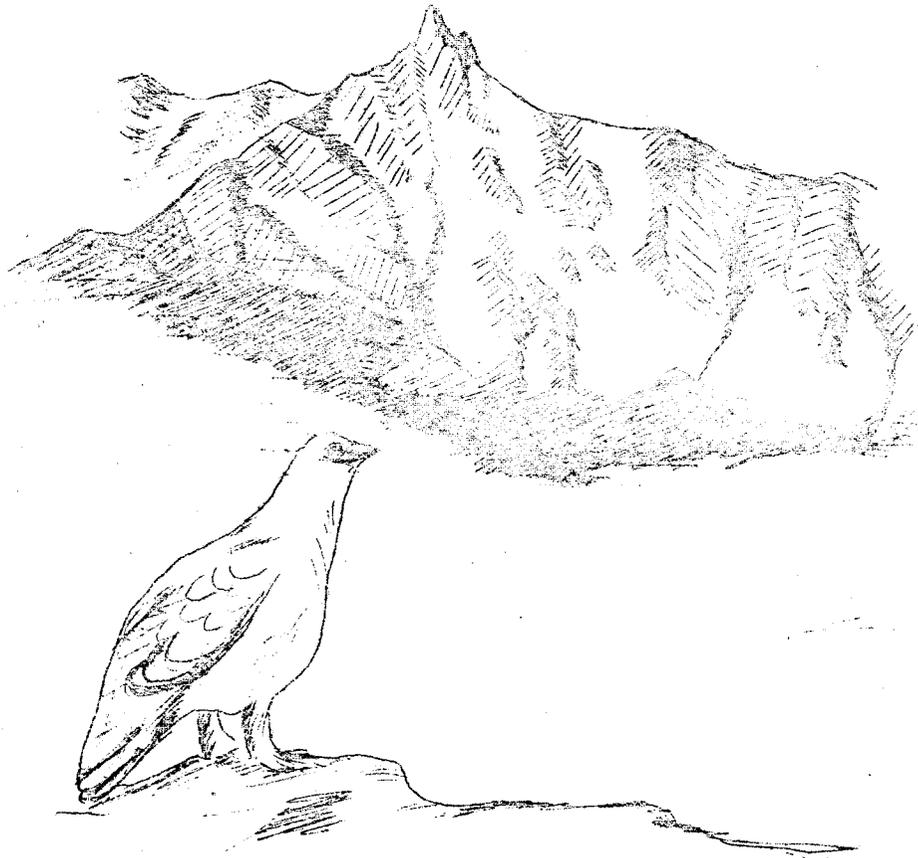


こぶし

第七号



上越こぶし山の会



- 二度目の頂須岩 大島美昭 1
- 八方尾根から唐松岳へ 池田洋子 3
..... 清水精一
- 冬の戸隠山での一日 大島美昭 6
- 妙高山 清水精一 7
- 正月山行入槍ヶ岳▽ 田中進 8
..... 杉本敏宏
- 冬のよねやま 田中進 15
- 労山北信越ブロッコ冬山研修会
..... 杉本敏宏 16
..... 小倉恭治 18
- 戸隠西岳P1尾根 小倉恭治 18

-
- 労山新潟県連冬山講習会 杉本敏宏 19
 - 労山新潟県連市五回総会 杉本敏宏 20
 - 火打登山 八木真理子 21
..... 芳沢喜久男
 - 五月連休合宿入鹿島槍ヶ岳▽ 木島忠彦 23
..... 杉本敏宏
 - 田中進
 - 清水精一
 - 小倉恭治
 - 上野光枝
 - 松岡健一 28
 - ある美術家 田中進 29
 - あとかき 田中進 29

四年ぶりの裏妙義だ。

夜行列車のデソキでは、走着音の為か夜眠をとりどころではない。上田を過ぎる頃には外気の冷たさの加勢もあり、頭は冷えまくる一方だ。

昨日の天気からは考えられないような、満天の星空の下、冬の星座の中を横川を急ぎ一時間ほど車が絶えまなく通っている舗装道路のアプローチを歩き、並木取付点の入牧橋へ着く。この単調なアプローチも入山川対岸に峰をている西大星、赤岩等の巨峰が見えるのがせめてもの慰めだ。入牧橋からは、人家や畑の中を廻り、山道へと続いていく。

しばらく進むと大遠見峠道との、分岐点にであう。峠の路を左に見送り、右へ路を進む。路を進むにつれ、沢の水音が聞こえ、沢も木々の間に見える快適な登行が続く。

しかし沢の水が聞こえなくなる頃には、果してこの路は尾根まで流れているのだろうかと思いたくなるような、やぶこぎの路となる。やぶこぎの路も終り振り返ってみると、浅間山が圍込に見え、その前には、朝通ってきた、入山跡落や自動車道が尾根のごとく小さく見える。再び並木取付であつた所で簡単な朝食をとる。

ポリタンに水をつめ公称。今まで目印にしてきた赤テープを頼りに行くと、道がなくなってしまう。そこで、左側に達する尾根に上がる。尾根に路をみつけこれを進む、谷急山がらの尾根とであつた所の木に青いテープを見つけた。これで路は、はっきりしたので先を急ごう。しばらく進むと路が分かれていく。まっすぐ進んでいく太い路を行くと、絶壁の岩の上へ出てしまう。ここからは、これから進むもうとじている路が大体わかる。もちろん今日の目的地である丁須岩も目に映る。キノコ雲のような丁須の頭に登っている人も、

確認できる。右へ直角に曲っている細い路を少し降りると、立木に枯枝で×印がある。路はここから左へと続いている。

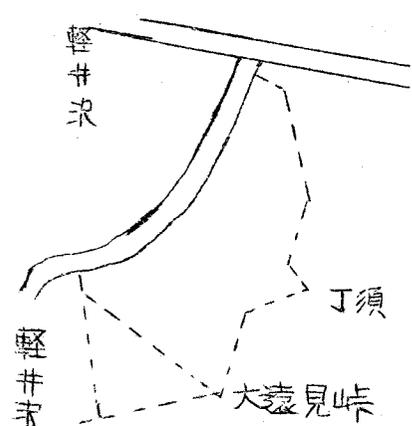
あとは大遠見峠目指して下るだけだ。

大遠見峠で初めて道標で分る。ここからは裏妙義らしい登降の激しい路や鎖場の連続で、前回通った路だ。鎖場といつても難関は二ヶ所だけだ。ほぼ垂直の所にある、横に五十メートル位の所は、鉄のアングルがところどころに取り付けてはある

ものの、その間は今にも斬をさうな細い木が二、三本ツマ衰してあるだけだ。もう一ヶ所は、最後の詰めの手須の肩へ出る所

にある二十センチ位のものだ。これはチムニー状の所を登る鎖だ。手須の肩へ出ると、回りは何もなく、遠くの間々が見えるだけ。下りは最も簡単で早い鎖況を降りる。コルまで降り、鎖を頼りに降りる。岩が濡れているので要注意。あとは沢に沿った道を下るだけ。快適な下りだ。ここではとりたてて書くようなことはない。

高崎



コースタイム

横川	6:15	4:15	入牧橋	5:55
分岐	6:15	4:15	並木求	7:15
尾根	8:20	1:20	大遠見峠	7:40
赤岩	11:50	12:00		10:50
急山	11:50	12:00		12:25
急谷	11:50	12:00		12:40
横川	14:50			

この山行では、道に迷ったら、まず見通しのきく所へ出る。他人のつけた目印だけに頼ると、自分を見失ってしまふ。それに、道練、余り人の入らぬ所ほど道標が必要なのではないだろうか、ということを感じた。又いつか、遠くまで登ってみたい。ただし、四年前のようなことはないことを願う。

八方尾根から唐松岳へ

池田洋子

十一月二十三日は晴天に恵まれ、車中からの、白馬三山、鹿島槍、五竜が私達を歓迎してくれ
るかのように朝日に輝いていた。白馬駅から
たくさんのスキー客と一緒にバスに乗り八方へ
向う。ケーブルに乗るための整理券獲得に、
スキー客の向にまじって並ぶ。待ち時間の長い
こと長いこと、約二時間待たされて、ケーブル
に乗りこむ。ケーブルの高い所からの眺めはす
ばらしい。眼下には待ちきれずにスキーを持っ
て登って行く人たちの列がづづいていっているが、
小さく見えた。ケーブルで海拔一四〇〇メートル
の先平までいっきにあがってきこまう。
長い列の続くリフトも途中で入れてもらい黒菱
平に着く。ここで昼食をとり身仕たくを整える
。焼けつくような太陽が雪に反射してまぶしい
。リフトはずつとついており、汗をふきふき快調
に登っていく。わーケルンもななく通りすぎ
わ二ケルンで休憩、白馬、杓子、鏡、白馬三山
東面が、手にとるように、絵にかいたように、
私の眼前に広がっている。赤い屋根の、白馬山

荘か村営頂上宿舎どちらかを内服ではっきり、
見ることが出来たし、ヤリ温泉のけまりも見え
たように思うのだから、

木島氏の望遠鏡をおかりして、不帰東面五竜
など、山をすみからすみまでのぞいてみた

冬山の景観のすばらしさをまんきつでき、
「ああ」「来て良かったなあ」と、

明日の天候を予想するべくもなくと氏こんでいた
。お三ケルンを通りすぎ、八方池の近くで、

リマックをおき、みくなど肩をくんで雪を踏み
かためる作業、雪洞を掘りトイし作りにとりか
かるものとは別れ、テント設置にとりかかり、

夕食の準備も開始され、楽しい夕食会がはじ
まり、アルモールの軽装と共にのどじまんが、

披露され、にぎやかになる。おはなつみにと
雪洞へ行くのに、外に出てみると、闇夜に白馬

三山がはつまりと歩き出している、回りはミーン
としているもの音一つしない。明日のアタック

をめでして早めにシラフの中にもぐりこむ。
24日

何時頃か、風の音でたびたび目がさめる。
テントをたたき音、外は強い風が吹いているよ

うだ、朝食をとり、外に出てみると風と共に雪が降っていた。アイゼン、ワカンをつけて頂上に向けて出発。雪はおかまいなく降ってくる。私は、もくもくと登る。吹きあげてくる風で、体はピッケルでささえられないと吹き飛ばされ、こしまいそう。お腹はすいてはいないが、体力が消耗されるのでパンを口に押し込み、休むこともできず登る。髪も眉も顔も霧でバリバリにこびりついてる。鼻水は出るし、口はおもうように動かず、ツートンカラーの目出帽をかぶると、プロシヤのテイストロイヤータとひやかされる。丸山ケルンを過ぎ、頂上と唐松小屋の分枝点に着く、みんなが一息つこうと唐松小屋へと下る。小屋の入口はたくさん雪が吹きこんで、暗い小屋には数人の人達が出巻の準備をしており、私達と入れかわりに出て行った。頂上へは30分かかるずに行けるといわれたが、これ以上風雪の中を進む気にはならず、唐松小屋で、木島、八木さんの私の三人が残り、みなと別れ、分枝のところで待ち合せをする。みなが頂上から来る時間をみかけから、この小屋を出発したが、待っても、待っても、なかなか来ず、霧をまきらすためになまな声で歌をうたつ

たが、風が体の中も吹きぬけるかのように霧をかひいと伝わってくる。風のあたらないところまで降りようか、八木さんと岩かげにて待つ。みなどうしたんだらうか、何かあったのたらうか、ふまつな事が頭をかすめた。「オーバ」という声に、皆無事を知り、一安心、もくもくと下山。南知、登って来たルートはまったく消されてあり、途中ルートがわからなくなり、木島、杉本氏が捜しに当たる。前方は吹雪で何も見えず、立ちどまっているのやとである。ルートがみつかるまでじっと待つ。私の頭の中には「遺跡」という言葉がかげめくっていた。私の顔は泣き顔になつていて、この頃と思う。さすかベテラン「こつちだぞ」という声に、やや顔もやわらいだ。やつとテントに到着。撤収にとりかかるが、この時の風の強かったこと、強かったこと。オーバミットを忘れてしまったので、あまりの冷たさに感覚がなくなるので、手と手をたたくぎぬかせて、感覚をよみがえらせた。回りみちをしなからうもみな、無事に帰るこのでき、冬山のすばらしさと、恐ろしさを味わった。思い出深い山行であった。

八方尾根登山(十一月)(二日目)

清水

昨日の晴天とは、まるで違った嵐のよう
風に私はびくくりした。一夜でこんな
に天気がくずれるなんて、思ってもみな
かつた。リーダーに訓練だといわれて、い
や本顔をしながら唐松へ向かった。八
方池から唐松ではあまり急な登りは
なく、夏道ならきつと素敵なハイ
キングコースだと思ふ。しかし今日
の天気は最悪で、ピツケルなし
では立っていらぬほどだ。これ
でも全員、唐松小屋まで登った。
小屋からは、頂上までの組と下山
の組と別れた。

今回の山行は、初雪の素晴らしさと、
一夜にして変えた初冬の嵐、訓練
にしては過ぎた。

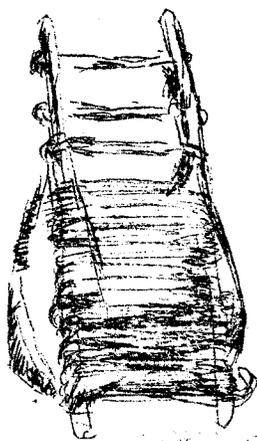
コースタイム

十一月二十三日

直江津(五時十分) 白馬(六時二十分) ケーブル
(六時五十分) 黒菱平(七時四十分) ケーブル
(八時二十五分) 丸山ケルン(九時四十分)

十一月二十四日

デント(六時五十分) 丸山ケルン(八時三十分)
唐松山荘(九時五十分) 唐松山頂(十時三十分)
丸山ケルン(十一時四十分) デント(十二時十分)
黒菱平(十四時三十分) 細野(十六時三十分)
白馬(十八時三十分) 直江津(二十時十分)



高田を出發するときには、降りだすのではないかと思われた天気も、長野にはいれば雪はかかってはいるものの、やはり新潟の冬空とはどこか違う。

さすが、寒さの厳しい土地だけに、バードサインも凍っていて、途中で車を押ししたりしたこともあったが、チェーンをかけ、どうにか奥社入口までたどりつく。

入口で身仕度を整え、杉並木の中を出發。トップには僕がたつ。すでに、多くの人がはいつているらしく、道はかなり踏みしめられていく。道が良いせいか、オーバードライビングになる。後から「早いぞい」なんて声をかけられる。声をかけられた直後はよいが、又しばらくすると後から声がかかる。それでもみんなついてくる。奥社からは、真白な飯綱山が妙に間近に見える。

さあ、出發。あの急で曲がりくねった、夏道も今は雪の下に埋もれ、今はただ先行パーティーが付けていった、ラッセルの跡を差すばかり。

五十間長屋での休憩後は、他のパーティーの前になつたり、後になつたりしながら進む。天狗の露地で「G・D・M」の連中に会う。ザイルを使いながらの登高だ。

どうやら新人の訓練らしい。鎖場では今日、山に入っているほとんどのパーティーが一緒になつてしまったのではないだろうか？ 夏と遠いアイゼンをつけている為か、とても登りにくそうだ。時間だけが過ぎていくばかりで、我パーティーはいつこうに前へ進めそうにない。しかしここで時間をつぶし、頂上へ登っている帰りの時間が遅くなるので、残念だが、ここでひき返すことにする。下りは登りほど楽ではない。五十間長屋までは、ザイルを使ったり、緊張の連続だ。ここで輪かんをはずす。ここからはもう、ラッセルの跡をたど

るだけだ。斜面が急になると、皆さんの得意とする尻制動がでてくる。皆それぞれに楽しんでる。奥社が見えるようになるころには、この楽しい山行も終りが近づく。頂上へは登れなかつたが楽しい一日が過ぎせたことを、同僚の皆さんにありかとうと言いたい。今度くるときは、頂上を踏めることを願いながら戸隠を後に、車は高田へと、帰路に着く。

コースタイム

高田(ナ)	—	奥社入口(9:30)	—
奥社(10:30)	—	五十間長屋(11:10)	—
天狗のろし(11:30)	—	鎖手前(12:00)	—
五十間長屋(14:25)	—	奥社(15:00)	—
奥社入口(15:40)	—	高田(19:30)	—

十二月史例山行(十二月の妙高山)

二日目 清水

朝から、小雪がちらついていた。今日はトップで頑張りうなんて気が全然ない。結局最後からのこのおんかけだ。

冬山の装備もあまり揃っていない私だったが、冬山のメンバーに参加できたのも、この日の会に入っていたおかげだ。そんな事を思いながら歩いてみると、天狗堂のあたりからラッセルの音がきた。私は体力にあまり自身がないので少し心配していた。でも膝位までの雪を四っんばいになってかきわけ、すぐ後の小林さんに差をつけた。私より小林さんのほうが苦しそうだった。夏道の鎖場をトラバースしないで目の前の岩稜を登りはじめた。慣れない岩に足を滑らしながら、なんとか頂上へ着いた。頂上で昼食のパンをかじりながら、FBのYとラブユ、頂上に三十分位いて、同じ道を下山した。

正月山行の記録

メンバー

上杉本 桑原
古木 田中

八月二十九日 前夜、直江津を出て松本駅

で三時向程の仮眠を採った後、急行アルプ

ス六号に乗る。先車はスキー客や登山客で

猛烈に混んでおり身動きすら出来ない程で

あった。こんなに混んでいては！と先が

案じられたが有明で降りた登山者は少な

かった。有明より夕クシで赤千巻電所へ

そこから中房温泉まで夜道をトボくと歩

いた。さすがに信州の寒さは厳しく凍った

道に何度も足をふらつかせた。

中房温泉でアイゼンを着けいよく小生に

と、初めの本格的な冬の北アルプスに

足を入れた。雪の量はたいした事もなく、

道も立派なものであつたが、さすがに背巾

の荷は重く合戦小屋迄の距離が非常に長く

感じられた。

タイム 直江津(15) - 有明(45) - 赤千巻電所(55) - 中房温泉(85) (130)

赤千巻電所(55) - 合戦小屋(74) (10)

記 田中

八月三十日 4時起床。星が出てすばら

しい天気だ。朝食の雑煮を食べ終えたら時

半頃夜が明けはじめ。東前東の空に富士

山がくっきりと浮かび上がっている。

大キジを打ちながらのなごめは素晴らしい。

池バレーがみな出発した後を、一

番最後にゆくりと赤山荘へ向う。夏道は

左へ巻いているが冬道は尾根筋を通って

いるので眺望が良い。

赤山荘に一月五日の食糧とワカシを置いて

いくことにした。雲が出、風が吹きはじめ

た。赤千巻のつり岩に着く頃はもう吹雪。

高瀬川から吹き上げてくる風は、湯沢の湯

の臭を運んでくる。均通し岩の音はシリ

リは、突風の中で一人静かに我々を行って

いた。まるで呼吸をしているかのような月

が我々を吹き飛ばそうかと思つたと、

次の瞬間に吸い込まれようとする。大井岳へ

の道登は歩く体力よりも風に耐える体力の

方が必要だ。風とさけるために這って登ら
なければならぬが、その小を大変だ。

ひま、と立ちあがったとたん突風に突さ
飛ばさ小又亂程すべりてしまつた。マシ毛
に木がついて向を見えぬ。オーバー手袋
なしに手で暖めると融けて落ちるが、今度
は泪が出て、その小が凍りついてしまふ。

や、この思ひで大天井頂上に着いた。休
む間もなく大天井へ下る。ガスと向も見え
ぬ。さ、前を行くメンバーの姿もうす小
がらだ。そんな時、一瞬、カスが暗れた。

何と眠の前に立派な建物があるではな
いか。冬の荒小は日、こんなものだ。小屋の前
にブワウワの積み跡をみつけ、その小を利用
して設営した。か、この大雪山の冬に入小

した時は、こゝで一週間程、閉じ込められ
る。ま、だが、今回は、あの時のように荒小
なければよいか。

記 杉本

分イ、合戦小屋(30) 荒小(30) 一、為エ
門吊岩(30) 喜作しりーフ(30) 大天井(30) 大天井(30) 大天井(30)

八 12月31日レ 小さな低気圧の通り過ぎた
後、山にすばらしい天気かおとすれる。朝
から風は強いが朝陽が雪煙を赤く染めてい
る。朝食をとりテントから出ると、丁度正
陽が雲をひきわけて輝き出すところだ。

一担頂上に登り、稜線が下り下る。す
ぐ下りずぬのトラバース、地パリーテイが
イルモホトといふが地々ほくろゲイルが行
くことにした。北側の斜面は雪の氷態
はあまりよくない。トラバースが終るとガ
ラ場。再び湯俣から吹き上げる風が強くな
ってきた。

大天井ヒエツテは陽にまりの中。風も当
らずボカボカ。夏道はトラバースして
が、冬は急登しビークへ。稜の眺めが良い
。稜線の北側は冬の強風が荒れ狂つてい
る。南側ほう、くわ、く春のようだ。

赤岩岳の凹地にテントが張る。細い稜を
わたり、しばらく行くと西岳ヒエツテが見
える。

小屋付近の雪を除いてテントを張った。

橋沃を下る人影があつた。暖かいのく、テ
ント前で早真を撮つた。

一九七四年ふノ、さようならノ
タイム

大天荘(7時) ↓ 大天井(8時) ↓
ト高岳ヒュッテ(14時) ↓ 設営完了(14時)

形本記

ハ一月一日レ 昭和50年元旦、北アルプス
は強風とガスで閉じた。しかも正月早々寝
不テテ乱床は六時であつた。「おのづか
」の言葉で初め「あ、今日はもう正月な
んだな」という気分になつた。頂上への
アタックは天気次第という事になつたが天
気は良くなりそうな気配だつたので時間ほ
遅いが一応行ける所迄アタックしてみよう
という事になり、急いで行前を開始した。
テントから最低鞍部迄が一番の難所であ
つた。急な斜面もようやくやく過ぎて最低鞍部
に着いた頃、その望々たる姿を前面に
現わしてゐた。

尾根筋は、もう教パーナーが頂上に向つ

た後で、立派な道がついてゐた。「もうか
したら頂上迄行けるのでは」とそんな希望
すら湧いてきた。早朝の風と、ガスが嘘の
ように消え去つて青い空に映える稜の姿が
登頂の気持を煽りたる、夕方の疲れなど気
にならぬ程であつた。

冬山といえどもさすがに稜は人気がある
のか人が多い。稜沃を下るパーナーがアリ
のように点々と小さく見えた。かなりのペ
ースで登つて来たのだが後主ヒュッテ上節
に着いた時はすでに12時に近かつた。頂上
は目前、人の姿が見える程であるが頂上迄
行くには時間が足りないとの事。天候との
他の状況からリーダーが下山の決断を下し
た。残念ノ冬山では教レ方ないと思ひなが
らひやはり未練が残つてしまふ。しかし感
情に左右されない冷静な判断が特に冬山
に於いては必要なのだ。「いつか必ず」という
思いつゝサレ雲に隠れた稜を後にした。

ヒュッテ西岳(8:30) ↓ 最低鞍部(9:25) ↓ 9:30

↓水俣乗越(9:50)↓ヒュッテ大槍(11:30)
↓殺生ヒュッテ上野(11:45)↓水俣乗越
(14:00)↓ヒュッテ西岳(14:25)

田中記

へ1月2日V 昨日と違い、今日の朝は雲一つない快晴。

御来光の陽を受け、雪をいただいた穂高や槍が輝き去る様は何とも言えない感激の場面である。その素晴らしい光景をバックに皆思い通りのポーズを写真に収めた後、テントを撤収、今日の泊り先地蔵山荘に向けて出発した。

一度来た道は精神的にも楽だ。大天井ヒュッテより喜作新道のコースを採ったのであすが、トレイルははなから途中からは、ルート工作も困難をまわめ、急斜面天荘に到着と決定、そのまま頂上を目指した。この道は仲々の難事であつたが、ようやく大天荘に着く事が出来た。テントを張る。人の使つたテント場をそのまま再利用させてし

う事にしてテントが隠れくしまう程のブロッコを積み上げた。

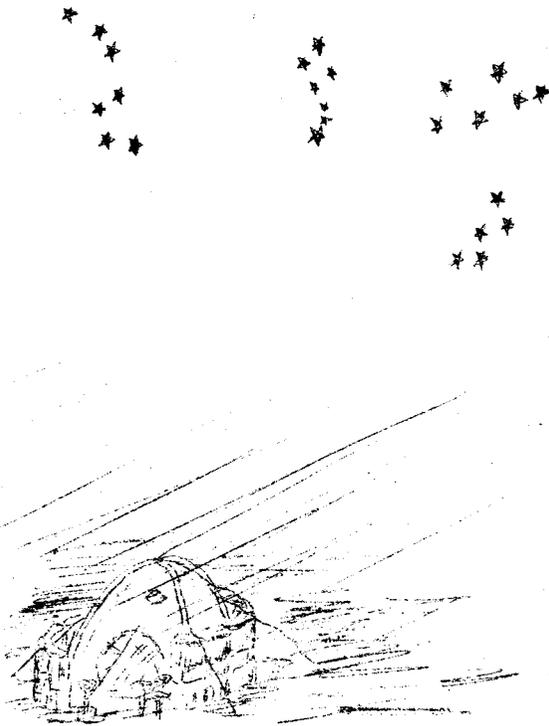
今日の冷さ込みは厳しく外に出した温度計はマイナス十八度を示している。

外にあると眼下に大町の街並の灯が明るい松がりを見せ、空は満天の星座であつた。

コースタイム

ヒュッテ西岳(8:15)↓大天井ヒュッテ(11:20)↓12:00)↓大天荘(14:30)

田中記



ハノ月3日V 雲が多く、あまり天気は良くない。昨日急に冷えこんだのは、やはり寒冷前線の通過によるものだ。

この山行四度目の大天井山頂上を踏み、キレットへ下る。風が止はじめ、夜が明け切っているのに、とんよりと暗い。30日ほどではないが強い風だ。

燕山荘について荷物を探したが見当らない。小屋の管理人が研って行くと保管していた。無断で置いて行かないようにと取りに行ったら石木君がたいぶしぼられたらしい。他の冬期小屋ではこんなことはないのだが。

合戦尾根に入ると、稜線が吹いていた強い風はとたえ、おたやかな別世界に変わる。合戦小屋の休憩、大正主れという冬期の人が多人数ほどはしゃいでいた。

登りにあんなに苦労した合戦の道は、今やアスファルトの舗装道路の狭だ。おまけにパイパスまで出来ている。口道工事の場所と土木課が沢山まで作ったのだろうか。

中房温泉について、アイゼン オーバーシューズ等はよし、身軽になる。旅館に行くとビールも4本購入。テントを張ろうと思っただけが、露天風呂がないようなので、下の村道小屋に泊ることになった。

久しぶりに風呂に入り、湯上りに飲んだビールの一杯のうまさ。シートと暖かたにしめわたる。

暖いふとんの中ぐ、ゆくりと寝た。コースタイム

大正(8:30)↓燕山荘(11:55/13:30)↓合戦小屋(13:00/13:10)↓中房温泉(13:45/14:20)↓有明荘(14:40)

杉本記

ハノ月4日V あうため、おめ、とう。久しぶりのたたみ、こたつ、風呂。感銘を禁しむ。

宿の従業員にタクシと確認してもらい、お風呂。入山時と同じ道をしとる。朝の空気がまたすがすがしい。小守がチラチラ、風に舞って眼の前をよとる。

冬のおねやま

メーバー S.50.2.2
杉本 小倉 小林

志木 田中

雪の量が少ないので車で大平頂まで行き、林道から登り始めた。

雪の量はさう多くはないが海に近いせい
か、湿った非常に重い雪である。

夏道の左の沢より取り付いたのであるが
傾斜は、かなり急である。ブッシュを抜く
とロマンスヒルと呼ばれている山高い所に
来た。この地名は最近知ったのであるが信
仰の米山にさぐわれない地名のように感じ
ならない。

この地実よりほぼ夏道と同じコースをた
どることになる。頂上が紅ずくにつれて雪
も乾燥したものに変わってきた。頂上附近
で高校生のパーティーに出会った。が実に元氣
のいい雪中で雪の中を駆け下りて行き草駈
天振りを発揮してくいた。

山頂の御堂は避難小屋と共に雪に埋もれた

状態であった。去年建てたばかりの非常に
立派な避難小屋に入って、熱いお茶を体と温
めた。

下牧口より近くの山岳会の4名パーティー
が登ってきた。内一人はセ柱であった。美
人で名をヨリ子さんと言う(後で知る)さし
ずめK山岳会の華というところか。以前山
行を共にした事のある山岳会だ。たのぞお
茶を差し入れた。帰りはグリセードの練習
と兼ねての下りである。小生のはシリセー
ドに近いものであつた。たがそれでも結構楽し
いものであつた。

夏道を下りたK山岳会とは登山道入口で再
会の道びとなつたのだがどういふ風の吹き
回しか車の所で彼女からリニエの差し入れ
があつたからさあ大変、親切と義理堅さ
が売りもの。山男はお礼に是が非でも車に
乗せ、さむらわねば...と言ひ出した。その
うちに私が愛車にと〇〇氏と△△氏の間に
シヤンテンが始まりました。勝つた△△氏
と同乗の小生もその恩恵に属し車中大いに

楽しんで使っていたのですが、考之るとせ、かく冬の山をエスコートしてきて三名の男性に申し訳な、ような気がばりてなりませんでした。

コースタイム

大平部落(7.55)↓山頂(10.40)↓大平部落(13.20)



コブツ<モクレン科>

田中記

登山地信越ブロッフ

冬山研修会

(一九五五年二月九日〜十日)

杉本 敏宏

今回の冬山研修会は、我々こぶしの会と新浮梁運盟にとり、技術的にも、思想的にも、様々な面で、大きな意義をもちつものとなつた。

JKACにおいても、泉運においても、全国運盟の催しや、ブロッフの行事に参加するのには全く久しぶりのことであつた。主催者の弁によれば、「地信越五泉の仲間が一堂に会したのには何年ぶりだろう」ということである。

参加者は全体で98名。富山、石川各11名、福井3名、新浮梁3名、京前から2名、兵庫から4名、あとほ地元長野県から4名であつた。新浮梁は、糸魚川3名、みらくさ4名、JKACも6名であつた。

研修会は、奥技と講演と討論という形で進められた。初日の夜、行なわれた一橋大

学助教 渡木 国考氏の特別講演は、民主的
スポーツ運動と其の組織の析果にとつて非
常に有益な指摘もなされ、学び、生かし
ていくことの必要性を感じた。

実技の面では、様々な技術が、その目的
に充じて、用具、道具の発展、進歩に依じ
て改善されていることが示された。特にこ
の数年の進歩はめざましいといつてよいだ
ろう。そして、ここにこそ、登山のもつ優
位性があるともいえるのではあるまいか。
従来の技術や、目下協の技術を批判的に学
び取り、安全登山と大衆登山のための、勤
労者のための新しい技術を確立するたへの
努力がなされているのである。

「講習」ではなく「研修」ということが、
一面では非常に強調されてきた。講師団
の見解、技術を「教之とむ」というのでは
なく、お互いに研つていくものを出し合ひ
、良いものを作りあげようとする姿勢は、
純々として、しつと学んでいく必要があ
る。これは自己の技術をかくし、他に知ら

せようとしない閉鎖的な既存の山岳会には
真似のできないことなのだからである。

この研修会はまた、「登山とは何か」とい
うことを言葉ではなく、身をもつて理解す
ることができたという点で、泉連の再建に
むける重要な意味をもつていたのではない
だろうか。長野や、石川や富山の仲間達
の泉連が一つとなつた姿とバラバラの新潟泉
との対比。泉連の役割の重要性と必要性を
参加者が強く感じ取つたことと思う。

主管団体であつた地元長野泉の仲間達の
奮斗で、研修会は大きな成功を収めたが
、その努力と他泉の仲間達の期待に充てる
道は、ただ一つ早急に新潟泉連盟を再建す
ることであろう。



戸隠西岳 P1 尾根

メンバー 桑原、木島、左木

ハ木、小倉

ハ3月8日土曜V朝からすばらしい天気だ
ノ高田を車でお発して空光社の手前から入
り、上稀川の橋のところにて車を止める。上
稀川にさつマダラダラと長い登りでもうい
やになつてくる。カラマツ林を通り抜ける
と目の前に戸隠連峰がすばらしい。向つて
石から戸隠のハ戸隠、本院岳、西岳、P1、P2
P3とスチールのゲツ、カイ山だ、アルプス以
上かむ？ P1 尾根の取り付きでナントを張り
、早めに飯を食らう。ナントが三人、ツエ
ルトで一人、雪洞で一人、バラバラになつ
てぬる。

ハ3月9日日曜Vまだ暗いうちに去発、今
日も天気になりそうだ。星がキラキラ光つ
ている。ヘッドライトの明りを前の人の足
もとを照らしながら行く。登りは急いずブ
ツシユを抜けるとよい急な斜面となつて、

P1 上を見て登るだけ、だんだんと西岳、
本院岳が大きくなつてきたが残念ノ時間切
れで、西岳登頂はむりであつた。下りはザ
イルを使つて快調に下り、ナントにもど
つて下山の用意をしまつて下山。車のところにつ
いた時にはもうま、暗になつてしまつた。

小倉記

西岳の初登攀は昭和6年8月、長野時金
局の板倉勇氏によつて行なわれた。その若
師の記録は政下平広恵氏により「山と溪谷」
レオ80号（昭和18年）に紹介されてゐる。
西岳に登山道が切開かれたのは、それが
ら30年近くたつてからであつた。
◎山と高原地図シリーズ、妙高、戸隠山地
図より。



湯山新潟県運冬山講習会

杉本敏宏

三月二十日、二十三日の三日間、妙高山大谷ヒッテ附近で、湯山新潟県運再建準備会の手配、上越こぶし山の会主催で、冬山講習会が行なわれました。これは、再建に向けて活動を開始した新潟県運の仲間達の交流と、二月に行なわれた北信越アロソクの冬山研修会で学んだ技術等の伝達集会とを目的として行なわれたものです。

4山長会から20名（みちぐさ2、岳樺3、蝸牛6、こぶし9、男16女4）が参加しました。

一日目は、池の平からリフトであがり、要から、ワッタン赤倉山中腹まで登り、南地獄谷に下りました。ところが、ガスが濃く、この下り道がわからず苦渋しました。入山自体がよい訓練だったといえます。

大谷ヒッテ附近にテントを張り、夜は、こぶしのテントを張りに分散して交流会を行ないました。

二日目は、朝から雨が強く訓練どころではありません。ヒッテの2階で座学ということになりました。鉄ポトルを使って、アソクス等の訓練です。

この間、あまりの強風にテントが飛ばされそうになり、あわて、散散しました。みちぐさのテントが破れ、こぶしのテントも穴があいてしまいました。妙高でもめずらしい強風でした。夜はヒッテの2階に全員集合し、交流会を行ないました。

三日目は、前日とはう。てかわ、た上天気になり、ヒッテ横の斜面で、滑落制動、雪上歩行、アソクスの訓練を行ないました。この日一日は皆真黒に陽焼けしてしまいました。雪上で昼食もとり、午後から下山。一昨日苦渋した所も晴れてしまえば大したことはありません。池の平まで軽快に下り解散しました。

天候の具合が悪くに配しましたが、当初の目的はほぼ達せられたと思えます。

羽山新潟県連盟が五回総会開かる

去る4月13日、北魚沼郡小出町、小出郷福祉センターで、羽山新潟県連盟が五回総会が開かれました。

羽山新潟県連盟は一昨年5月に第4回総会を開いて以来、活動が停滞し、加盟組織も小委員会ももちながら、十分な交流、意志統一ができていません。崩壊状態にあり、つらかったものです。そうした中でも各単位の委員会では多岐な活動が行われており、当会やみちぐさ山の会などから活動再開への具体的提案がなされてきました。

それが、昨年の全国登山祭典、今年2月の北信越アロウワグ登山研修会に各会から多くの会員が参加し、その中で県連の必要性その果す役割等が理解され、ついに2月16日長岡市において第一回代表者会議が開かれました。この会議には県連に加盟する各会が参加、結集し、そままでの県連活動の弱点が大抵に出た。他方各会の

県連への要求と現状が報告されました。そうした中から、活動再開への具体的手立て、活動の方向も明らかになり、5名の再建準備委員会を設け、始動しました。

こうして活動再開への第一歩を踏み出した県連は、ひさつづき、第二回代表者会議を直江津で、また二回の再建準備委員会を小十谷で開き、県連のあるべき姿、再開後の活動等について討議してきました。そして、羽山山において登山講習会を行って（当会主催）全国連盟の救助訓練（富士山）に7名を送り出すなど、2ヶ月余りの間に大きな飛躍をし、組織的にも、感情的（思想的）理論的ではなく）にも再開の準備をととのえてきました。

こうした活動を反映して、第五回総会は、東新潟山の会を除く全会から代表が参加して開かれました。

総会では、第五回総会に至る経過報告につづいて、新たな活動目標が提案され、承認されました。活動目標は、今年度の活動

の基本として次の2点を強調してります。

①果運活動を定着させる。

②交流の場を作る。

また以前の活動の弱点を克服する立場から事務局と機関紙部を強化することになりました。会員拡大についても、一般的に提起するのではなく、新築、長閑、上越の会を特に重視する事、単位の山の活性化をめざすなど積極的なものとなってります。さうに連帯対策についても、原案を補強し、救助隊を結成する方向で活動も強めることが決まりました。

こうして今回の総会は、以前の果運活動の低迷に終止符を打つと同時に、この2ヶ月間で得た貴重な教訓を生かし、新たな果運活動を築きあげる再出発の総会でもあります。

最後に、果運の現状に合わせて規約を改正し、新役員を選出して総会を終りました。

記 杉本敏夫

新大打山登山

夏かといないのどかな土曜の午後、笹ヶ峰より大打山へ一日二日の山行。

予定時間より少々早くおくれで笹ヶ峰の本々の中を歩き始める。

奥道を歩くとツツと歩いている感じとしては、このまま歩いたらいいかなと思ふ、と小屋にいくまで不安をいっぱい。途中小屋の小さな木を見えたり時は、本意にうれしかった。バネ気味の秋はツツと歩くと、木々から木ハッスル、月の光の下を歩くと、ログと木々のや、と高き地ヒュッとした感じ着いた。

ここには、時々飢気味の異様な顔もありました。

コースタイム

13:00 笹ヶ峰の木々から 19:20 高き地から

如 火打山登り

夜、早く眠れせに介、三時頃に目覚められた。外の風木はウビエウビエなつていた。今日は大候が思に外なと考え有り、三ツツの中下めん等の起る時間を、待つていた。

めん存も、私と同じ時刻に起き出し、ない。小林さん存まが、最よに起き、自分の荷物を手とりして、ラジエースに火を付けコッパエルに集めていた。

私も何時か反介に起き、自分の荷物を、まとめて、朝の食事につ介の雪を、取りに支へ出た。

外へ出たらまだ、雪出ていて、きれいにあった。今でもあの美しに雪が、輝は花よりきれいな。

めん存が食事を作って食べ有り、今日の予定を、杉本さん有り、六時十五分にめん存が来た。出発は、用巻ををして、大崎三十分に高岩池ヒエツツも出発した。

朝は、雪が降り、寒いので、アイゼンが、ホッカリきいてある、寒いので、気が、よくて、どうしようも有り、

頂上附近のハイマツの新へ行く、真白な雪の、高島が、親子、ハ利だった。

私は、始めて白い雪を見た。

高島に会った、急に気が出て、足取りが、軽く頂上まで、

頂上に着くと、大気、いい、介、めん存さん有り、

頂上、不気味な身、取り、下り、

私も、三回、四回は、ま、火打に登って、

記 芥又孝久男

五月連休合宿

鹿島椿が岳

1975.4.27 - 5.5

五月連休合宿のまとめ

C.L 杉本敏宏

今年の五月連休合宿は、例年とは形態を変えてみました。それは「定着」という形式を取り入れたことです。JKACでは、今まで縦走等は良くやっていました。一ヶ所に定着し、その付近をくまなく登るといったことはなく、未知の、未経験の山行形態でした。

この連休合宿に「定着」という山行形態を採用した理由は、できるだけ多くの会員が、合宿に参加できるようにするためです。

会の発足当時は、会員全員がドンクリの背くらげで、特に力量の差というのはありませんでした。ところが会の発展と会員の成長の結果、現在では、新しい会員と古い会員との間に力量の差が生じてきています。そのため同じコースを全員で登るといった従来のやり方では、会員間のアンバランスが大きくなり、お互

いに負担をかけることになりす。また、各会員が要った取場に勤務しているため、休暇なども要なり、同じ日に入山し同じ日に下山するということも困難になつてきました。もしそうすれば、入山日数がかぎられてしまふわけです。

こうした会の新たな発展段階に合わせて、各会員が、その取得可能な日数だけ入山でき、その力量に合ったコースを登ることができ、しかも一つの山行、一つの合宿として成り立つ形態が必要になり、定着合宿が選ばれ、実施されたのです。

こうして五月連休合宿は、4月27日から5月5日までの9日間、鹿島槍の大冷天西映出合付近にベースキャンプを設置して行なわれました。

合宿は、日標としていたマイレクト尾根と布引尾根は積雪の不安定さ、雪崩の危険のため取りきませんでした。天狗尾根、鎌尾根、東尾根の三尾根を登ることができました。

天狗尾根、鎌尾根は好天に恵まれ快適な登攀でしたが、東尾根は雨に降られ非常に厳しい条件下での登攀になりました。

全員が入山した5月3日からは、雨の日が多く、テントの中での生活だけで山に登れない人もいました。今までにない登山の別の側面を味わえたのではないかと思います。

また今回の合宿では、北信越の冬山研修会で知り合った仲間達と再び交流することができました。すぐ近くにテントを張った上小笠山と文欽し、長野登山からは多量のウイスキーをわけてもらいました。その他にも多くの登山の仲間に出会いました。

今合宿はその目的の大部分を達成しましたが、反省点も多々あります。その最大の課題は、食糧計画の問題です。もっと緻密な計画を立てることと、軽量化、低廉化しなければなりません。

以上

蔵島嶺ヶ岳 天狗尾根

杉本 木島

4月28日 晴

八川沢の吊橋の下流に張、テニントを徹収して、必要裝備のみを持ち、あとの荷物は林の中に置いてお茶。

八川沢は雪で左岸、右岸のどこでも好きなの所を自由に歩ける。雪もかたく歩きやすい。しかし深い沢で、兩岸の急な斜面のみが目に入る。発電所の水取り入口を過ぎると、荒沢の本合にある。普通は荒沢をすこし入った所で右手に取りつくか、我々は以外に水量の多い荒沢を渡り、天狗尾根の末端から取りつく。取り付きは急なブツシユの中を登るが、足がすべり、ほとんど不登りである。しかしブツシユを登るにしたがい、や、と尾根うしくなり、この辺より前行看の踏跡が残っている。ここからはもう今日の露堂地の天狗の鼻が見えはじめる。左手には東尾根が上部まで登山看も含めて

良く見える、荒沢は茶色の雪が重り合っている。

オニクロアールは、午間が大きく切れた雪でうま、くいる。ここは、雪沢の中央部を真正する。上部の雪は落ちそうであるし、眼下は、荒沢まで雪の急斜面だ、慎重にかつマピードを上げて通過した。

オニクロアールの上部は、オニクロアールまで歩き易い尾根である。

このころより気温が急上昇して、荒沢、カクネ沢では逆風なく雪崩が発生している。オニクロアールは、急な雪面と所々雪が切れ、いる為、ルートを取るのに一苦労する。この場所はフィックスゲイルが無数に残っているが、役立ちそうなのはあまりない。

オニクロアールを板けると一気に天狗の鼻に出る。天狗の鼻は広々とした所でテニント場として絶好である。東尾根、嶺ヶ岳、荒沢、奥壁、北壁、キレットと左右に素晴らしい景観がある。大谷原(630)荒沢(690)オニクロアール(730)オニクロアール(750)天狗鼻(780)

4月29日

天狗の鼻を去り、教分で北俣のコルに着く、
左手に荒沢、右手にカフネ里に下降するル
ートがついている。ここからは、カフネ側
にあるナイフエツダの急斜面を登る。この
斜面はカフネ里まで続いて落ち込んでいて
神聖を扱う。ここを登るとヤーマ岩峰であ
る。

ヤーマの岩峰は、右手カフネ里側へ数メートル
ル券、尺所から取り着き、丘上方に登る。
この岩峰もやはり滑ればカフネ里まで落ち
ると思うと、それほどむつかしい所ではな
い。緊張する。ヤーマ岩峰を去ると、ゆる
い雪の斜面に大きな岩がドツシリと座った
所だ。その上がヤーマの岩峰で、この岩は空
松があり登り易い。また所が荒沢の頭で、
この上はもう、素晴らしい雪原が北峰まで
続いている。

北峰への最後、登りはナイフエツダになっ
ているので慎重に通過し北峰に出る。北峰
からは夏道と南峰へ。南峰からみる齋岳及

び、キレット方面の五竜岳は素晴らしい。

ここまできると、進走する教グルーブと出
合う。南峰を下り布引岳との中間より、大
きな雪ピの出ていて、鑄尾根へ、バックス
アップで下る。そこは、広い雪面で本谷ま
でこれから下る鑄尾根が一望出来る。鑄尾
根は途中ナイフエツダ所あるが、ブ
ン高度を下げ本谷に出る。本谷は昨夜北
俣本谷より突いた雪崩で、すごい様をみせ
ている。まるくブルトラーゲで雪を割った
ようだ！

この雪崩跡を丘にみる、なだらかな下りの
本谷を下り今日のテント場西俣の谷合に着
く。ここからより今迄の晴れを空に雲が出
る小雨に変わった。早々に大川沢谷合河口に
置いてまた荷物を取って来て、テントの中
で飲んだインスタントミソ汁の味が良か
い。

コースタイム

天狗鼻(6:30) 北峰(10:45) 南峰(12:20) 鑄尾根(12:00)
本谷(14:00) 西俣の谷合(14:30)

へ4月30日V 雨時々雲 況観

昨日から帰るか帰らないか思案していた
木島氏が、やゝと決心して日時過ぎに下山
。この広い谷合いにたつた一つの簡易キニ
トがあり、その中にたつた一人て居る。

雨は、一応昼頃上がったが、夕刻にはま
た所折パラついていた。

一人どうにも聞いていけると昼から重大
ニュースを流している。「南ベトナム、グオン
バン、ミン天統領、革命政府に全面降服。

政府の建物には白旗が立ちはじめ、統率カ
を失なつた政府軍兵士が市民から略奪をほ
じめた」という内容だ。ついに来たこの日、
南ベトナムの新たな建設に期待する。

たつた一人どうりると時間のたつのが何と
おぞいことか。行きまじらず、夕時にはしう
寝ることになった。

へ5月1日V 晴れ

雨もあがり天候も回復しはじめた。朝食
後ブラリと布引尾根取灯点まで偵察に行つ
てきた。あらこちらでカモシカがいない。

偵察から帰つてきて、昨日の雨で濡れた

シニウツなど木にかける干し、具重の旗
を木にしぼつていると、下からどこかで泉
たつたところのある顔が上がつてくる。上小
林君ではなにか。あとからぞくぞく上がつ

てきた十数人の大パーティ。静かだ、たこ
の台地も仲間がふえ、一度にぎやかにな
つた。午後、日光浴にもあきたので、上小
林山の訓練を見学に行つた。いい場所をと
られてしまった。

う晴すぎ、やゝと小林、田中両氏がや
つてきた。これどうまいおかすにありつける。
一月中ま、たぐ良天気だ、た。



杉本記

フキノトウ<キク科>

ハ5月2日V 鏝尾根

4時起床、6時お登、緩やかな傾斜の本谷を組んでゆくとまず目に入ったのが北横本谷より突き出し川の態をなした巨大なナダレの跡であつた。そのスケールの大さうにたアルプスも、そして自然の力というものを見たような気がした。

鏝尾根を登つていふ所でも各所に入るキレツ、そして所折首を立ち、崩れてゆく雪の塊に春山の恐ろしさを感ぜなれに感じてしまふ。その点、天気が良かったのが気持を禁にしてくわいように思われた。頂上への眺望は素晴らしい、帰りは稜線で昼寝を墊しんだ。テントに着いた所間も早かつたので濡れた衣類を木にかかり、雪上の日光浴とシヤコンだ。夜は特製の豚汁に話もほすみ、おしじまをういにいっしつかダルマも横になつてしまひました。

コースタイム テント上(5:40)下稜線(8:40)9:00

↓頂上(9:00)↓10:30↓稜線(10:40)11:30↓テント

(320)

田中記

ハ5月4日V 鹿島槍ヶ岳、東尾根、2日目

昨日からの雨がまだ止まらずいやな朝だ、だが、4時起床6時5分に上登する。右に天狗尾根、左に鏝尾根を見ながら、第一岩峰はなんなく登つたが、又二岩峰で2メートル位の岩が三つ重なつていてなかい登れようもないので、ザイルで確保する。私はその間岩と岩の間で約1時間立、こいた。冷たい雨が岩を伝い雨たれとなつて私の首の中へ、そして体を伝い靴の中までぐじやーいになつた。それでも1時間30分後には全員登り切り北峰へと向つた。途中無線がBCと連絡する。北峰から南峰の稜線は風がすこく強い、2所に南峰の頂上に着くが風が強く、視界が悪いので休む間もなく鏝尾根へと下山する。鏝尾根の雪夜もいつ雪崩が落ちるかと思つて足が震える。それでも霧が晴れ、BCが見えた時は、ほつとした。

メンバー 木島 田中 吉不 清水

コースタイム

ニの沢の頭(6:30) ↓ オノノ岩峰(7:30) ↓ オノノ岩峰(8:30) ↓ 北峰(11:30) ↓ 南峰(12:00) ↓ 本谷BC (12:30)

清水記

八月五日(月) ↓ こともの日

昨日の雨がうそのように、今日は晴れ？ 気持ちの良い朝である。朝食を済ませて仲間たちは雨で濡れた物を干し始めた。みるみるうちに干物の灰が木に満ちたようになった。

ザイルワークを二組に分かれ、約二時間ほど行ない、その後は自由時間として仲間たちは、いろいろなことをしてる、懸垂下降の練習をする者や、グリセードをする者、写真を撮っている者、一番好きなのが来た自由時間であった。テナントを回収してられ、それ荷物と整理して下山する。

大町へ出て大町の山岳博物館へ入館する。ここには地学室、銅土室、生物室、山岳

室、そして小説「氷室」のモデルになったといわれるザイル切崩事故、山岳遭難事故の解説や遺品などが展示されておりました。先では特別天然記念物のカモシカの缶子が人によくなついていたのがびっくり。博物館から望む北アルプスも素晴らしい。

小倉記

初めての春山

上野 光夜

こがし山の会に入会して初めて山行に参加するので喜こんでトコヨーついて行きました。どの沢を見ても雪崩がついていてのを見たら、来るんじゃないかと後悔してしまいました。戻りど来りました。以上帰るわけにもいかないので、歩き止しました。歩きながら春山、マキケン、尺などつくづく考えちゃいました。今迄にも、映画やテレビで春山の雪崩の尺の遭難した姿を見てり聞いたりしていましたが、まさか自分で行くとお思っていたから、雪崩を

この目で見たら、恐しくなつて帰りたくなりました。でもこんな事思いながら、度島礮ヶ岳へ行く人達について途中迄行つたのです。雨のはれ間にのぞく島上を見たら行つてみたい、という気持になるのが不思議でした。

それにしても残念な事は、去来した晴から降り始めに雨はぜんぜん晴れなかつたこととです。高田を去つて一時間くらいたつてから、ズッリと降り始め、この雨は私が帰る迄降りていました。おかげでテントの中は雨水がたまつてしまつて、これを汲み出すのにおわれまゝにいました。夜寝ながらも足もとがじめじめして気が悪くつちつとむいい夢を見ることが多くなつてしまつた。雨の降る春山だんて最低です、やっぱり雪も少ししかなくて、かすみがかゝるくらいは天気がいいですね。

でも、バスの中から見たふしの花は、白くとても美しいでした。この花だけは春山でなくては見れないものですね。

ある美術家

松岡 健一

私の知人に6年前中学校の美術科教師を
年となり、今はただその余生をかつての
再内分野で暮らすことなく素晴らしい作品造
りに毎日を送りながら居る人がいる。最初に
会つたのが3年前のある講習会の時で、約
6ヶ月の期間休むことなく一生懸命で講
じていたのが印象的だ。その7月の末、
妙山の念の大塚山行白馬登山の時訪つてみ
た時、その人が美術の先生であつたことを
初めて知つた。山頂迄の5時間、スベツク
ブーツを背負い、断崖絶壁に懸れをとり
ぬ程度に素直くペンを走らしているのだ。
氏。先日久しぶりに会つた時、相交うが作
品造りに余念が無く毎日どの作業に没頭
してるとの事だ。またその合間合間にラ
ジオ、テレビ又市民講座でロシア語、フラ
ンス語、中国語を受講し勉学に没頭してい
るとの事だ。氏。この2回はかり正月の筆状
にはロシア語で、新年おめでとうと書いた、

子色刷の素馬しい風景を刷、尺のを置いて
 いる。この絵画のイメージミブくりと、不刻
 彫りに一週間から10日費すことを聞き、私
 自身これに深い感銘を受け、そして今ほ
 また、美術の研究所に就し、いすれ中国の紋
 煙（井上靖の西域物語）を訪ずれ、古代中
 国文化の像徴とある遺跡を見学し、そこに
 滞在数多くの作品を鑑みてみたいとのこと
 だ。尺。その口調にはさすがに強いものがあ
 り、瞳は輝いていた。

が、中国歴史講座を受講したこともあ
 り、以前からの興味深さと、夢と憧れを今
 となつて実現したいというのだ。果して國
 交が完全に結ばれていない今それが可能と
 なるかが尚疑問だが私自身いつか実現するこ
 とを心から念願している。

私が帰った後早速く白い藤の花の日本画
 作品に手をいれりと羨り切、ていた。その
 帰りがけ女性の美容ともなる白藤の乾燥し
 たものを買ってきた。初目を尺のめした方
 どうか申しお下さい。

おわり。



暑か、た夏も過ぎて紅葉
 燃える季節となりました。
 今は無雪期登山の総仕上げ、そして来冬バ
 き登山のトリーニングを兼ねての登山とい
 うところでしょうか。こぶし七号は遅れに遅
 れてとうとう十月になりました。まじまじと
 本来ならば八号の発刊期なのですけど、
 どうもスミマセンでした、八号は分ンバリ
 マスので原稿の方ヨロシクお願いします。

こぶし

第7号

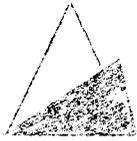
昭和50年10月26日発行

発行 上越こぶし山の会
編集 田中進

事務局

新潟県上越市東本町5の138
(杉本方)

TEL 0255 (24) 3787



JKAC